ゼミ教育における演劇ワークショップの実践と効果
――黒白劇社指導者桂迎教授をお迎えして――

“Practice and efficiency of Drama workshop with Prof. Gui Ying, instructor of Heibai Jushe”

中山　　文[1)]　桂　　迎[2)]

Fumi Nakayama, Gui Ying,

（論文要旨）

近年、学生のコミュニケーション能力向上を目指して、キャリア教育に演劇ワークショップを取り入れる大学が現れている。急速に市場化が進み複雑な人間関係が生まれている中国でも、1990年代から社会表現学が提唱され、一般の学校で教育演劇が実践されている。

中国の著名な学生演劇指導者である桂迎教授を浙江大学から迎え、ゼミの授業として連続５回の演劇ワークショップを開いた。その目的は、学生たちが社会における自分の役割を意識し、それにふさわしい行動様式を身につけることである。授業を通じて彼らは他者を観察することを学び、物語作りとグループワークの楽しさを学び、自分と友人の新しい一面を発見した。本論は、ワークショップの具体的内容、受講生による毎回のレポートと感想、桂迎教授の総括、筆者の考察で構成されている。

（Abstract）

In recent years, some universities have adopted drama workshops in regular classes to develop communication skills of the students. In China, human relation became more complexed as the transition to a market economy proceed rapidly, and social performance studies were advocated in early 1990’s, so that “Drama in Education” has been practiced in general schools.This year, we held five drama workshops in series as a seminar class with the honor of the presence of Proffesor Gui Ying of Zhejiang University, a prominet instructor of student theater. The object of the workshop is that the students to become aware of their role in society, and adopt an appropriate behavioral pattern.Through those classes, students acquired the skill to make close observation on others, learned the joy of creating a stories and working as a team, and discovered a new aspect in themselves as well as in their friends..This paper consists of details of the workshop, report from students, summary by Prof. Gui Ying and a study by the author.

キーワード：創造、教育演劇、コミュニケーションスキル、行動様式、グループワーク
Key Words: creation, drama in education, communication skill, behavior pattern, group work

[1)]神戸学院大学人文学部教授　　[2)]浙江大学教授

はじめに

近年、学生のコミュニケーション能力の向上を目的として、キャリア教育に演劇ワークショップ（体験型学習）を取り入れる大学が増えている。一橋大学では「キャリア形成に関わる諸科目」の中に開設されている「コミュニケーションと表現/教養ゼミ」（担当教員：高尾 隆）のように、ゼミ教育にも演劇ワークショップを取り入れている。このシラバスによると、「インプロ（即興演劇）を教育手段として用い」「仲間との関わり方、物語のつくり方、演技などを学び、最終的には劇場での公演を行う」ことで、「うまく人間関係をつくれなかった学生が、コミュニケーション能力について学び人間関係をつくり居場所をつくることに成功している」という[注1)]。

演劇学を専門としない一般の大学生に演劇ワークショップを行うことが、どのようにコミュニケーション能力の育成と結びつくのだろうか。さまざまな体験学習の手法があるなかで、特に演劇ワークショップがコミュニケーション能力を鍛えるとされるのはなぜなのか。また、演劇を専門としない教員がその手法を授業に取り入れることは可能なのだろうか。

本学人文学部では１年次前期から入門演習Ⅰという名称のゼミが立ち上がり、10数名のクラスを担当する。そこで大学生としての初年次教育を行い、大学生活に慣れるためのトレーニングを行う。１年次後期（入門演習Ⅱ）、２年次前期（基礎演習）という２度のクラス替えを経験した後、２年半のゼミ（専攻演習Ⅰ～Ⅳ）の所属を決める。ゼミだけに限っても、大学４年間に、最低４回は自己紹介をする機会が生まれることになる。

今年の入門演習Ⅰで驚いたのは、半数以上の学生が「自分は人見知りなので、話しかけてください」と自己紹介をしたことだ。話しかけられることを待っている人ばかりでは、会話のきっかけがつかめないだろう。案の定、彼らはなかなか打ち解けなかった。授業前はそれぞれ音楽を聴いたり、ケータイをいじったりして教師が来るのを待っている。静かなのはけっこうだが、何週間たっても学生同士の親密さが生まれず、初対面のような冷やかさを感じる。演劇ワークショップを授業に取り入れることで、この希薄な人間関係に何か変化が起こるのだろうか？

筆者の身近に、総合大学の教養課程で演劇ワークショップ形式の授業を開講している教員がいる。中国浙江大学の桂迎教授である。これまで筆者は桂教授から、演劇経験が一般学生に与える効果を幾度となく聞かされていた。曰く、「社会性と他者への思いやりに富み、チームプレイができる人間に育ち、卒業後は有為な人材として国内外で活躍している」と。

2012年４月、桂教授を訪問教授として本学にお招きし、中山担当の専攻演習Ⅱ（３年次）で、５週間にわたって浙江大学で行われている授業を再現していただいた。本論はその実践報告に基づき、演劇ワークショップという方法がゼミ教育に有効であるか否かを考察するものである。

Ⅰ．中国の「学生演劇」と「教育演劇」の歴史

（１）学生演劇

中国学生演劇の歴史は、1899年の上海セントヨハン書院の学生が上演した政治風刺劇『官界スキャンダル』に始まる。その後いくつかの学生劇団の上演を経て、1906年に東京で春柳社が上演した『椿姫』と『アンクルトムの小屋』は中国話劇（日本でいう新劇）の始まりを示す大事件となった。

当時の中国は清朝の衰退と西欧諸国からの侵略のために、国家の存亡の危機に瀕していた。救国救民の志をもつ学生たちは、国内の思想啓蒙運動と呼応した作品を選んで上演した。抗日戦争時期、国共内戦期を通じて、中国共産党は演劇のもつ社会的功能に注目をした。中国現代史において演劇は常に政治思想の宣伝媒体として重要な役割を果たしたのである。

中華人民共和国が誕生すると、「演劇従事者は国家が養成する」という意図のもと、北京と上海に演劇学の最高学府が設立された。それが中央戯劇学院と上海戯劇学院である。その後、中国の演劇人はこの二校の出身者が大半を占め、卒業生は国家の分配に従って各地の話劇団に国家公務員として就職した。演劇が特別な人々のものだった時代が続いた。

この状況が市場開放政策後に大きく変化する。国営・公営劇団は国からの補助を失い、自力更生を迫られて困窮した。だがさらに社会が豊かになりライフスタイルの多様化が進むと、北京や上海の大都市に演劇に参加するアマチュアが現れた。

そのきっかけとなったのが、90年代に一般大学で起きた演劇サークルの流行である。中国政府も学生演劇の「復活」を喜び、大学生演劇フェスティバルの開催を通してその活動を支援した。今回お招きした桂迎氏は課外活動としての学生演劇の指導者であり、彼女が1990年から率いる「黒白劇団」はその卓越した指導によって学生演劇の理想モデルとして高く評価されている[注2)]。

（２）教育演劇

教育演劇は、普通学校で行われる教育方法のひとつであり、演劇を専門とする学生への教育とはまったく別のものである。何かを演じるというゲームを通して、子供に多くのことを体験させ、子供の資質を高めることを目的とする。近年、中国でも「専門重視、教養軽視」教育体制への反省から芸術教育が注目され、その一環に演劇がおかれている[注3)]。

教育演劇界のリーダー役を務めているのが上海戯劇学院である。1995年に李寧嬰教授が欧米から教育演劇を持ち帰り、演劇ワークショップという手法を普及させた。企業は人材育成カリキュラムとして、学校はカウンセリングの一方法としてこの手法を活用するようになった。今や地域の活動や幼稚園教諭育成プログラムの中でひろく使われている。

1999年、孫惠柱教授は社会表演学（social performance studies）という新しい学問を提唱し[注4)]、急激に変化する社会に対応するためのパフォーマンスの重要性を説いたことも教育演劇の流行に拍車をかけることになった。2005年には同校の戯文系に芸術教育専攻が創設された。そこでは演劇に関する知見と技能をもち、学校現場で演劇ワークショップの指導者となれる人材が育成されている。中国での教育演劇は教養教育であると同時に、効果的なキャリア教育という面からも熱い注目を集めているといえよう。

この背景のもと、桂迎先生は2006年から全学共通教育の中で「キャンパス演劇の理論と実践」という授業を開講された。毎年 web 登録開始後10分で、60名の定員に600から800名が殺到する大人気授業である。

Ⅱ．桂迎先生の授業内容と学生の感想

今回の授業について、桂先生はこのようなシラバスを書かれている。

「演劇ワークショップを通して、他人と関係を結ぶことの苦手な学生が、社会における自分の役割を意識し、それにふさわしい行動様式を身につけることを目的とする。この授業では“ナンバープレイス”という９つのマスに区切ったパズルを模したワークショップ形式で行われる。学生はまず自分に割りあてられた職業・身分にふさわしい動きを想定する。次に様々な条件のもとで役柄の個性を明確にし、自分の社会的役割を認識する。最後に周囲の人々と関係を築きつつ、ひとつの物語へと発展させる。」

この授業に使用した教室は神戸学院大学有瀬キャンパスのフィットネスルームである。筆者は参加者全員に毎回レポートを課したほか、６週目に「ふり返り」を行い、アンケート形式で感想を書いてもらった[注5)]。

（１）具体的な授業内容

第１回（2012.４.17）

ウォーミングアップ：水になる（写真①）

①水滴　②０度の水　③100度の水　④水蒸気　⑤小川　⑥大きな川　⑦海　⑧大波

ナンバープレイス：学生は２グループに分かれる。床をガムテープで９マスに区切り、１マスに１人入る。

①動物を演じる　②職業を演じる。

写真①

第２回（2012.４.24）

ウォーミングアップ：①両手でボール作る。ボールがだんだん大きくなる。ボールで遊ぶ。

ナンバープレイス：①先週演じた職業になって、「歩く」「座る」。②各マスの中で、２人が対角線上に歩いて出会う。「こんにちは」と挨拶。通り過ぎ、端まで行って振り返る。「さようなら」と挨拶する。③横ラインをはがして３マスに床を区切り直す。各マス内部で、事件がおきる。ストーリーを作る。

第３回（2012.５.２）

ウォーミングアップ：中国戯曲の「身韻」という型の稽古。（写真②）

女子、男子各一列になり、それぞれ女役と男役の立ち姿をつくる。腕をあげ、視線の方向を変える。「山膀」（男

写真②

役の厳つい肩）「蘭花指」（女役のたおやかな指）に注意する（写真③）。

写真③

ナンバープレイス：①アットランダムに３組に分かれる。集まった各職業を生かして物語を作る。季節と場所を設定する。「春の街で」「冬の森で」「秋の学校で」という条件を付けて、その中で各職業が生かされるような物語を作り、演じる。②各マスを自分の部屋だと設定し、その壁が前後から迫ってくる。さあ、どうする？（写真④）③自分の部屋でやり慣れた動作を行う。ねっ転がる、本を読む、音楽を聞く、洋服を決める、料理する等。④その動作を４つの年齢で演じ分ける。幼少年期（子供）、青年期（大学生）、壮年期（親の年齢）、老年期（祖父母以上の年齢）今日は、このうち青年期の動作だけを演じた。来週は、その動作を残りの３種類の年代で演じるという予告がされた。

写真④

第４回（2012.５.９）

ウォーミングアップ：①身韻　②テンポと空間を意識する動作。歩く、早く歩く、もっと早く歩く。同じ動作を広い空間から狭い空間へ移行して行う。③３人１組で同じ動作（ボールを投げる）を弱く、強く、もっと強く行う。④２人１組で同じ動作を、強弱をつけて行う。→すれ違いざまにハイタッチをして強弱役割を交代する。

写真⑤

ナンバープレイス：①２組に分かれる。１組目がマスに入り、一つの動作を４つの世代で演じ分ける。②次週が最終回となるのでセリフ付きで８分間の作品を発表する。作品の共通テーマは「信頼」である。A 班「花束の意味」（写真⑤）の発表。

第５回（2012.５.16）第５回目の発表および講評会。

①B 班「とある飲み会での出来事」（写真⑥）②C 班「Ｔｒｕｓｔ」（写真⑦）③D 班「助け合い」（写真⑧）④E 班「超シリアス」（写真⑨）⑤桂先生の講評（写真⑩）

写真⑥

写真⑦

写真⑧

写真⑨

写真⑩

（２）学生の感想

① おもしろかったこと

・友達の知らない部分を見られたこと・役に変化をつけると、まるで印象が変わること・普段しない動きを、本気でしたこと・動物の表現（同じ動物で違う動作）・最終週の各グループの発表（アルパカ、ハリセンボン）・飲み会の演技・演技をするということが初めてで、新鮮でした・新しいことをするたびに、ワクワクした・最初のウォーミングアップ（水の流れ）で童心に帰れた・皆で協力して劇をつくったこと・Ｙ君の演技力！・王子様になりきっていた男子たち・演じること・１つの動きを４つの世代で演じ分けたこと

② おどろいたこと

・自分が大きな声を出せるということに気が付いた・桂迎先生の動きと、自分たち素人の動きの差・台詞がなくても、理解させられる表現力・ストーリー作りの創造力・１つの動きを表現するのにも、色々な方法があるということ・みんなそれぞれに発想が異なり、意外な一面を見ることができた・簡単な動作なのに、しんどいこと・演技って、意外に体力を使う・Ｙ君の狩人・みんな、演技が上手！・「水になれ」といわれたこと・職業の物真似をすること・ウォーミングアップの型（「山膀」）の時、思った以上に肩が疲れた・身韻の時の桂迎先生の凄さ

③ うまくいったこと

・台詞は飛ばしましたが、即興劇・日常動作の世代別表現・最後の発表の連携・グループでの「座る」の演技・後ろから斬られて倒れる動作・伝わった時に拍手が貰えたのは嬉しかった・ウォーミングアップのボール・最後の劇・あっという間に出来上がった台本

④ 難しかったこと

・自分が表現したいことが、なかなか伝わらないこと・最初の水の表現で、みんなで手を繋いだところ・普段知らない職業の動作・壁に対する表現・春の街で、冬の森で、というような場面を設定した上で演じるのは難しいと思った・普段、ちゃんと見たことのない職業を演じることは難しかった・なかなか自分が思うように伝わらないこと・声を出さずに動物を演じること。鳴けばすぐに伝わるのに、それができないのはもどかしい。・アルパカは難しかった・即興で作った劇で、言葉（台詞）を発してはいけないのが難しかった・２人１組での緩急と強弱・職業の表現が難しかった・声なしでの表現・水・身韻

⑤ わからなかったこと（通訳、指導の意図など）

・中山先生の通訳のおかげで、桂迎先生の意図が伝わりました・季節感の表現・初日のウォーミングアップの水の表現がよく理解できなかった・桂迎先生とは、意思伝達が上手に出来るのかが不安だったけど、中山先生の通訳・ジェスチャーなどを用いて、ある程度は理解することが出来た・中山先生が一時、いなくなった時。桂迎先生が一生懸命に中国語で続けようとされていたが、私たちには伝わらなかった・タイミングが掴めない・３回目に休んでしまい、身韻の動きがわからなかった・バレエのような不思議なポーズはいったい、何だったのか・身韻・対角線上ですれ違って変わるもの・

職業にふさわしい座り方、立ち方

⑥ つらかったこと

・吹っ切れていない時の自分・最初に王子様を指名された時、何をしたら良いかわからなかったこと・ワークショップを休んでしまった回があること・みんなが観ている中で、ひとりで演じて「それは違う！」と指摘され、何度も繰り返したこと・筋肉で保持するところで、プルプルしていました・台詞を覚えきれず、劇でとまってしまい申し訳ないと思った・たまに「似ていない」と言われ、グサっときた・毎回、どんなことをするのかがわからないということが、精神的に辛かった・シーンとしている中、１人で動物（ネコ）を演じたこと・最後の発表・見えないものを想像すること・演じているものが、違うもので伝わっていた時・ボールを使った動き

⑦ 発見したこと

・自分が結構、演じることが嫌いではない、ということ・腹黒い自分・Ｙ君のアクションの発揮・初め、出来なかったことが上達していけること・こういうものは、普段どれくらい周りを見ているかが重要になるな、と気付いた・男の子たちが、意外と演技派・自分の運動不足・同じ動作でも、演じる人によって全然異なって見える・ゼミのみんなの、開放的な姿・男子の発想の良さと、取り組み方が素晴らしい・表現力の高さ、なりきってる感・想像力１つで、色々なことが表現できること・みんなの新しい一面・演じることの楽しさ、難しさ・桂迎先生の日本語・人間観察をして、それを自分の身体で表現することの難しさ

⑧ 今回のWSで、あなたの得たもの

・友達を見る目・経験・細かい動作を観察する力・演じる為に回りを見ること、その力・演じることの難しさ、観察の重要性・団結力・信頼？皆と前よりも仲良くなれたような気がする・回を重ねるたびに、人前に出ることにも慣れて、「私って結構、イケる！」と思えた・情熱・１人でするより、大勢でする方が楽しい・自己表現力・信頼と絆・積極性、創造性

⑨ 桂先生への質問

・５回という短い期間でしたがありがとうございました・桂迎先生が、今のようなお仕事（研究）を始めた理由、きっかけは何ですか？・日本と中国の文化の違いは？

⑩ もう１度やりたい？　やるならどんな風に？

・機会があるならやってみたい・やりたくないかも・全員で１つの劇を作りたい・申し訳ないですが、もう御免です・声劇なら練習してやりたいです・職業を変えてやってみたい・全員でドラマを作ってみたい・背景、セットを組んで公演までしてみたい・「人」を演じてみたい

Ⅲ．桂迎先生の総括

「大学教育演劇への参加と創造の楽しい実践

——日本神戸学院大学人文学部学生演劇ワークショップ報告」

2012年春、日本神戸学院大学人文学部中山文教授の要請を受け、客員教授として人文学

部生のために演劇教育ワークショップの授業を行った。テーマは「物語を作る」である。５回の授業の中で、学生たちは簡単な演劇的動作から徐々にその動作を豊かにし、最後にはきちんとした物語をもつ、たいへんレベルの高い演劇小品を作りあげた。この過程はとても有意義で興味深いものだった。学生たちの創作と実践には自主的な意識が強烈にあふれ、いたる所に想像力が光り、予定の教学目的をりっぱに達成することができた。

以下はその教学過程の報告である。

１．ワークショップの目的と計画

はじめに、今回の演劇ワークショップは教育演劇（Drama in Education）の趣旨に従って目標を設定していることを明らかにしておきたい。教育演劇とは普通高等教育の中で普遍的に使用されている教育方法のひとつである。その重点は（演劇学校ではない―翻訳者注）普通学校で、演劇方法を用いた教育実践を行うことにある。

教育演劇が舞台での演出と異なる点は、その主目的が（完成された舞台作品ではなく―翻訳者注)、作品作りの過程にあることだ。参加者は指導者の下で、イメージを膨らませ、自分の経験をはたらかせて即興表現を行う。演劇形式を実践する中で、参加者は互いの理念と感覚を開拓し、発展させ、表現し、交流する。そして知力を啓き、知識を増やし、心身を活発化させるのである。

次に、今回の教学目的は学生に「演劇創作を通してグループで何かを成し遂げる楽しさを体験させること」であると記しておきたい。彼らは演劇ワークショップによって生活の中で蓄積した記憶の扉を開き、インスピレーションとイマジネーションを刺激し、興味深いエピソードや物語を組み立て構築し、最終的に教室で上演する。その過程で想像力を獲得し、創造力や表現力を高めていくだろう。

筆者の計画では、５週間10コマ（日本的には５コマ）の授業で、九宮格（ナンバープレイス）という特別な形式を採用した。文学に例えるなら、単語による表現を重ねて完全な文章にまでひろげ、最後には物語を構成させようという試みである。

具体的には、まずガムテープでフロアを９つのマスに区切る。一つのマスに学生１人が入り、その空間で創造力を膨らませる。学生は自分に与えられた単語から演じるべき人物のイメージを膨らませて表現する。その人物の基本形から始め、さまざまな性格的特徴や情緒を加え、さらに社会的役割の身分を加味して形を加え、いろいろな条件の下での人物関係の矛盾や衝突を表現する。学生は演技をすることでその人物とエピソードを体験し理解し、最終的に簡単な物語を作り、表現として完成させる。

参加者にはこの授業を通して、自分たちの扮する人物が有機的に組み合わさり、衝突する状況を理解してほしい。興味と情熱をもってプログラムを完成させるよう願っている。

２．ワークショッププログラム

４月17日に日本に到着し、18日午後からすぐに仕事が始まる。中山文教授が全課の通訳をしてくれることになった。

2007年にも神戸学院大学で大学生に対して演劇ワークショップを行った経験があったので[注6)]、今回のカリキュラムを学生が完成させてくれることについては、まったく心配はなかった。今回授業に参加する15名の学生はみな神戸学院大学人文学部の３年次生だ。文

字的イマジネーションや演劇的動作による表現能力には期待のできる対象である。

このプログラムは、以下の３つのポイントから成立している。

①　ウォーミングアップ

演劇は動作の芸術であり、動作は参加者の身体が集まって完成する。この時に必要となるのは、身体の動きを開発するきっかけとそのためのトレーニングである。演劇的規定状況の中でイメージどおりの動作を行うには、まず身体をほぐし開くことが必要である。例えば水の形態を摸倣する――凍った水、沸騰した水、気化する水。流れる水を表現するときは手をつなぎ、腕で波の動く様子や荒れる海原を表した。例えば板に打ち込まれる釘が沈んでいく状態や、きつく押しつけられたバネが弾ける様子を表現する。

今回、ウォーミングアップのプログラムに中国古典演劇の「身韻」の動作を含めた。中国古典演劇の中の人物になり、性別と役柄の特徴の差異を体験してもらうことが目的である。女性の優美さを表現する蘭花指、男性の山のような力強さを表現する山膀、ゆっくりとした「圓場」の歩き方などである。これらの典型的な中国文化の特徴を表す演劇的動作の中から、美しいイメージを体験してもらいたい。

②　演劇的要素の学習

ここでのポイントはまず演劇的表現を作り上げるための要素となる動きを体得し、次にイメージを膨らませて、具体的な役柄を演技で表現することである。ノートに書いた20の単語から、学生の演じる役柄を中山先生に選んでもらった。選ばれたのは、王子様、庭師、乞食、相撲力士、農民、運転手、教師、自動車修理工、清掃員、狩人、ダンサー、料理人、歌舞伎俳優、侍、歌手である。それをアットランダムに学生に割り振った。最初は紙面に書かれた文字に過ぎなかった単語が、演技的表現によって生命を与えられた。彼らは文字の単語から自分に課された役割の人物を演じ、演じる中からこれらの人々の存在意義をまじめに考えた。５回の授業を通して、自分の方法で人物に性格を肉付けし、命を吹き込み、最後には一つのストーリーを創り上げる……８分間の生活を表現するのである。

特筆すべきことは、演劇的な動きの要素を体験する過程で学生たちの創造力が開発されたという点である。一連の演技が完成するころには、自分の演ずる動きを信頼するようになっている。自分の演技によって仮定した状況を信じ、それに応じてリアルな感覚を表現する……季節による寒暖の変化や強風が身体や感覚に与える変化を動作でどのように伝えるか。一つの日常的動作を幼少期、青年期、中年期、老年期でどのように演じ分ければよいか。これらを実践のするために生活を観察し、生活の価値とその関連を表現する。演劇には人生を体験し実感することが必要なのだと認識するのである。

③　スケジュールの完遂

５コマという決められた時間でやらねばならないのは、まずナンバープレイスの１マスの中で人物の身分を確立し、指定された体験と人物を表現することである。次に、その人物の典型的な生活の動作から職業的習慣を表現する。さらに様々な感情や状況を規定し、情緒の強弱の表現し、色々な人物との関係を演じる。最後には小品を作り上げなくてはならない。

スケジュール作成当初から、順を追って徐々に積み上げる演劇ワークショップ形式の授業を予定していた。それによって文字から演劇へと変化する過程に学生を参加させ、体験

させるためである。この授業の最終的目標は、日本人大学生が演劇のもつ力を実感し、この授業に参加したことを心から喜んでくれることである。

3　ワークショップの結果と収穫

ワークショップの最終報告会は５月16日に行われた。ほかの授業の関係で、A 班の「花束の意味」はすでに前週の授業最後に発表が行われており、当日は13名が４班に分かれて作品を披露した。こちらの要求に従い、４作品の共通テーマは「信頼」、上演時間は８分間である。学生はこれまで自分が演じてきた役柄で、作品に登場する。ストーリーはまったく自由である。好きな者どうしで班を作り、それぞれの役柄を生かしたストーリーを創り上げ、表現して見せた。

最初の授業で自分に割り振られたひとつの単語が、最終的に自分が表現すべき人物形象になろうとは、誰もおもっていなかったはずだ。だが、５週間のワークショップで、彼らは自分の演ずる人物の形象を充実させ豊かにした。見かけや性格情緒の設計を含めて、その人物が多くのことを表現できるように練習を積んだ。その過程で彼らは自分の動作への信頼感を強め、様々な状況の下で具体的にどのような動作をすればよいのかについて練習を続けて来た。最終の発表では、人物関係を合理的に構築し、観客が納得する物語を創り出さねばならない。今まで表現芸術に触れたことのない日本人大学生にとって、これはかなり難度の高い要求だったはずである。

最終的な発表が教室での発表会作品で行われたのち、全員で討論して作品の評価を行った。最後に教師が個人的な総括を行い、５本の台本がそろった。

信じがたいことだが、全教学効果は学生たちが予想以上の成功をおさめたことで証明された。発表された５本の創作作品はいずれもテーマに込められた思想の奥深さや表現方式の多様性を感じさせ、たいへん面白いものだった。また授業終了後に教室での収穫を振り返った学生たちの満足感は大きく、きわめて望ましい結果となった。

現場で発表された５作品を見てみよう。学生が自分たちで選んだ「信頼」テーマの作品には、その視点にそれぞれの特徴がみられた。そのうち４本は身近な生活を描いていた。

A 班の「花束の意味」はダンサー志望の高校生と学校の掃除のおばちゃん（清掃員）という、毎日顔を合わせるが深い話をしたことのない二人の関係を描いた。進路に悩む彼が年長者のアドバイスで積極性をとりもどし、花束を贈って「平凡な生活」への感謝を表現する物語である。

B 班の「とある飲み会での出来事」は４人の社会的身分の異なる青年たち（自動車修理工、歌手、教師、王子様）がコンパを開き、お互いの状況報告をする。過去と現在を行き来しながら、信頼が友情を持続させることを表現した。

C 班の「Trust」と D 班の「助け合い」はいずれも普通の生活の中で発生する可能性のあるエピソードをとらえた。C 班（侍、農民、庭師）は庭いじりをめぐって、嫁・姑の問題を描き、D 班（運転手、歌舞伎俳優、乞食、相撲力士）は、故障したタクシーをめぐる助け合いを描いた。矛盾や衝突が身近に起こった時に、自分の行動で理解し信頼を維持することの重要性を表現した。

E 班の「超シリアス」では、狩人と料理人という一見まったく関係のない人物が合理的な空間の中で一つに設計された。狩人は獣に傷つけられ、料理人に助けられる。その後、

寡黙な二人の間に徐々に信頼が生まれる。ありえそうもない組み合わせなのに、なるほどと思わせる信頼関係に結ばれた二人を描き上げた。

今回の教学から突出した結果を総括すると、第一に学生たちが身体を使った演劇教育の中で楽しく創作活動に参加したことがあげられる。第二に発表会で学生が創造力と表現力を開発し証明したことがあげられる。彼らの作り上げた人物像は、もともとの割り当てられた役柄をはるかに超えて豊かなものとなった。彼らは強風を、波を、森林に住む野獣を、はては道路の自動車まで、もともと想像もできなかった各種のイメージを演技で表現したのである。第三は演劇的方法が大学生の生活や生活を表現する習慣を養うことである。彼らは役割をきちんと演じるために、その人物にとっての代表的な動作を探し出そうとした。ある女子学生は相撲力士の生活上の習慣や動作を一生懸命に理解し真似た。ある男子学生は王子様が馬に乗る動作やリズムを絶えず練習した……このように他者を観察し、その気持ちを理解し、表現しようとした経験は、彼らが今後従事する社会で必ずプラスとなるだろう。

第四は、これが最も重要なことだが、彼らがたった５週間という短い演劇ワークショップで、今の自分を見つめなおし、多くのことを発見したということだ。おそらく演劇に接することがなければ、社会には様々な職業や社会的身分の人々がいることや自分の不完全さに気づくことはなかっただろう。他者を観察して表現するという体験をしたおかげで、これまでとは別の角度から自分と他者を理解できたのだ。これは机の上での学習よりももっと重要な体験であり収穫である。この角度から全参加者は新たに前進する目標をもち、これまでよりも闊達な態度で自分と世界に向き合うことができるだろう。

まさにアメリカニューヨーク大学の著名教育者 Nellie McCaslin が語ったように、「演劇は、正式であろうと非正式であろうと、すべて人類のための創作であり、人類生命の観察に基づいて選択され、準備され、進行し、引き上げられるものなのだ。」

最後に、神戸学院大学人文学部が中山教授と真摯で叡智に満ちた学生たちと共に過ごす５週間の教学機会を与えてくれたことに、心より感謝いたします。

2012年　９月22日　杭州にて

Ⅳ．考察

筆者は通訳として５週間桂教授の授業に伴走した。その間、しばしば教育演劇における指導者の条件について考えさせられた。以下４点を挙げるが、桂教授がいずれにおいても卓越した指導力を発揮しておられたことを記しておきたい。

①　アイスブレークの上手さ

アイスブレークとは、初対面の者が集まり緊張している雰囲気を和ませることをいう。これはワークショップの指導者には、たいへん重要な能力とされている[注7)]。桂先生は一瞬にしてその場を和ませ、集中させる技をたくさん持っておられた。水になる、ボールで遊ぶ、歩く、もっと早く歩く、男役・女役など。それらはいずれも言葉を必要としない、身体動作であることがポイントである。ゲームのような動きを通して、恥ずかしがり屋、内気、人見知りの学生のハートをいっきにつかみ、集中させる。それらはアイスブレーク

の技法であるとともに、授業のウォーミングアップとしても機能した。ウォーミングアップをしながら、心と体の緊張を解きほぐしていったといえよう。これらの組み立ては、いずれも経験に基づく桂先生オリジナルのテクニックである。

② 積み上げの巧みさ

同じ職業を毎回演じることにより、学生にはいつの間にかその職業の特徴的動作を身につけ、演劇初心者なりに表現の幅を広げていった。小品制作時には、「自分の職業を活かした設定づくりや動きを演じられるようになった。動きが大きくなり、自分の職業への理解が深まったと感じる」「無意識に行うと意識して演じるではこんなに変わるものか」という感想が上げられた。「単語から文節、文章に仕上げていく」というのは比喩ではなかったのだ。だが桂先生から指定された職業の中に、相撲力士や歌舞伎俳優という日本的ではあるが身近にない職業が含まれていた。それらは動作のバリエーションが少なく、偶然これを振りあてられてしまった学生は、その後苦労することになった。

③ 指導の的確さ

二回目の感想では、「最初はどう動いていいのかわからず、動きが小さかった。でも少しアドバイスを受けると、すぐ動きがよくなっていったと思います」「桂先生の判定が厳しくて、何度かやり直しになりました。でもみんな言われたところはビシッと直して良くなっているから、さすがだと感心しました」という感想が目立った。桂先生の的確な指導で、自分の演技に自信を持てることがわかる。

④ 批評の言葉

「今日はあなたたちの発想力に驚かされました」「これからの活動を通して、最後には新しい自分を発見することができます」「このステージがあなたたちの最高の舞台です。回を重ねるうちに、今いる空間が立体的に見えてくることでしょう」「周りを見ることができれば、周りに気を配る人間になれる。それは自分にとって大きなプラスになります」等、学生たちはレポートの中で驚くほど忠実に桂迎先生の言葉を再現していた。それは彼らが先生の言葉を聞き漏らすまいと神経を集中させていた証拠である。学生が求める言葉を的確に与える姿に、大学生演劇の指導者としての長い経験と実力を感じた。

また学生たちのレポートからは、以下の4点が共通して読み取れた。

① 物語作りの楽しさ

前半3回の授業では言葉を使うことが禁じられていたため、学生のストレスは大きかったようだ。4回目の授業で発表作品についての話し合いが行われたとたん、どの班もたいへん活発な討論を時間いっぱい行った。「楽しい。物語を作って行くのが楽しい。演じるよりも考えるほうが楽しかった」「一人ひとりがちゃんと台本を考えているのがすごい」という感想に、人文学部文学・文芸領域の学生らしい側面が見えた。自分の作った作品を発表する場が用意されることが、新たな緊張感と意欲を生みだしている。

② グループワークの楽しさ

「一人で演じるより多くで演じた方が楽しい」「不安だったが、こうして練習しているうちに、仲良くなるのだなと思った」「これまで知らなかったみなの一面を見ることができた」「友達の発想が多彩で、いつも『一本取られた！』と思う」「みんな細かいことを注

意していて、うまいなぁ」「女性は女性視点の、男性は男性視点のと、それぞれ特徴も違ってとても興味深い」等、友達と一緒になって一つの作品を創り上げる過程は、学生には望外の喜びに満ちていたようだ。

③　新しい自分の発見

「自分の内に秘めた能力の新たな発見」「最初の自分と比べて、成長することができたと思った」「私自身の新しい姿を発見すると同時に、友達の新しい姿を発見することが出来ました。演劇の素晴らしいところは、さまざまなものを表現し相手に伝える自己表現であると同時に、他者に対する見方を変え新しい発見ができることだ」等、自分と友人の新しい一面に気付いたという感想が多く見られた。

④　他者の観察と理解

この授業を通して、ゼミ生たちは意識的に他者を観察するようになった。三回目の授業で、ひとつの動作を年代別に演じ分けるという宿題が出されると、「それぞれの時期にしか出てこない特徴を捉えることできたらいいのだろう。両親や祖父母を観察して次回に備えよう」と感想が見られた。年齢、性別、職業、社会的地位などがどのような身体的な特徴を生むのか。それを捕まえるためには、これまで興味のなかった他者を観察しなければならない。またその特徴を演じることで、他者の気持ちを理解することができるようになる。他人を演じるとは他人の気持ちを理解することに他ならないことを、学んだのである。

大多数の学生が「他の授業ではできない経験ができた」という喜びを語る中で、最後まで緊張が解けない学生もいた。この学生は「他人の演技を見るのは楽しい。私も恥を捨てられるようがんばらなくては」「実際にそこにはない見えないものを存在するかのように演じるというのは難しい。そして恥ずかしい」「ひたすらに人前に立つのが苦手な私」という感想を書き続けた。「自分が他人にどのように見られているか」をたいへん気にする学生が自分の心を開放するには、５週間という時間では足りないのかもしれない。

と同時に、その内向性もまた個性だと思う。皆が皆、人前で大声で話せるようにならねばならないのか。このような授業を経てもやはり内向するのが自分ならば、そのような自分を受け止めればよい。そうすれば、今回の経験はもっと自分に適した人生を選択するきっかけとなるだろう。

授業で行われる演劇ワークショップと民間のそれとの違いは、「指導者が評価を出す」ということだ。学生はこちらが想像する以上に、指導者の反応、評価の言葉に敏感である。教育演劇の目的は「上手に演じること」ではない。だが授業の一環として行う場合には、どこかのポイントで試験（上演）をすることが必要となる。その過程で学生が心に不要な傷を受けないように、指導者側にも配慮が必要になるだろう。

終わりに

「初めは自分の足元を見ていたみんなが、次第に前を向き先生たちの顔を見ながら話を聞いていた」「演劇をやる上で演じることはもちろん大切だが、１人１人の協調性はもっと大切なのではないか」「自分ではない何かになるのはとても気持ちのいいことなんだ、

ということを今日初めて知りました」。これらの感想から伝わるのは、この授業には多くの発見があり、その経験が彼らを積極的にしているということだ。

だが一方で、「毎回、どんなことをするのかがわからないということが、精神的に辛かった」と感想を書いた学生もいた。たとえわずかな情報でも、次週の授業に向けてイメージを持つ、心構えを作る、時には予習をすることで、心のゆとりを持ちたいと考える学生がいることを教えてくれる。

桂先生は「日本の学生は想像力が豊かで、教師の意向を考えずにどんどん自分の考えを広げる。中国の学生はもっと教師の顔色を見て、評価を気にする」と語った。だが、日本にも気にする学生は、もちろんいるのだ。カリキュラムの一部として取り入れる場合は、そのような学生の心をどう開くかについては、日本人の感覚で丁寧に再考する必要があるだろう。

演技を学ぶことが、一般の大学生にとってどのような意味をもち、何の役に立つのか。筆者もまだ理論的に納得するだけの言葉を持たない。だが大多数のゼミ生がこの５週間の授業を楽しみ、普段の授業よりも生き生きしていたことは事実である。神経を集中させて他者を観察し、友人と熱く語り合い、一つの作品を創り上げ、笑い声をあげる。そのような体験ができるゼミを、今後も作り上げていきたいものだと深く思った。

演劇ワークショップはゼミ運営にたいへん大きな効力をもつと考える。言葉よりも身体を優先する演劇ワークショップでは、「話しかけてほしい」学生たちもゲーム感覚の中で容易に打ち解ける。そのため、すでに固定した友人関係を作り上げている３回生よりも、まだ友達のできていない１年生の方が劇的な効果が期待できるだろう。

だがその手法を、演劇の専門家でない教員がどのように授業に取り入れることができるのかについては、まだ手探りの状態である。桂迎先生の授業は、ゼミ運営の在り方に大きなヒントを与えてくれた。今後この観点から、さらに研究と考察を進めていきたい。

注釈

１）一橋大学以外にも、演劇ワークショップを授業に取り入れている情報を紹介する。

①一橋大学　平成20年度　キャリア教育協力科目講義概要

http://www.rdche.hit-u.ac.jp/~gp/subject/careerteaching.html

「「コミュニケーションと表現」では、インプロ（即興演劇）を教育手段として用いながら、アクティビティーやグループ作業を通じて体験的にコミュニケーションと表現について学び考えている。「教養ゼミ」はインプロを学ぶことを目的としたゼミで、ともに即興でつくっていく際の仲間との関わり方、物語のつくり方、演技などを学び、最終的には劇場での公演を行っている。このような協同作業が初めてであるという学生、また、クラスや部活・サークルでうまく人間関係をつくれなかった学生が、コミュニケーション能力について学び人間関係をつくり居場所をつくることに成功している。これらの授業は、キャリア形成の基盤となる自分を見つめ直す力、人と関わる力を養う場としても機能している。」

②帝京大学短期大学・人間文化学科　「人間文化学科紹介　この授業に注目」

http://www.teikyo-u.ac.jp/applicants/literature/college/human_faculty/

演劇とコミュニケーションⅠ・Ⅱ

「近年は全国の小中高の授業や就職試験に演劇の要素が取り入れられるなど、演劇はこれまで以上に、社会に密接した活動として認知されつつあります。本講座では、座学をほとんど行わず、ワークショップ型の授業を展開。最終的には実際に参加者全員で演劇作品をつくり、観客の前で発表するプロセスを体験します。実践的な過程を経験することにより、社会で求められる「コミュニケー

ション力」を養います。」
このほか、京都精華大学　「キャリア教育科目キャリアデザインⅡ（２年前期）」
http://www.kyoto-seika.ac.jp/career/support/careersubject/
や嘉悦大学「ミュージカルの手法を取り入れた集中授業（キャリアデザインⅠ）」
「2011年度のニュース」http://www.kaetsu.ac.jp/11-08-18-01.html でも、演劇を取り入れた授業の報告がなされている。

２）桂迎氏のこれらの実践は『桂迎：校園戯劇档案』（中国戯劇出版社、2000）、『校園戯劇』（浙江大学出版社、2005）、『舞踊欣賞与創作』（浙江大学出版社、2006）、『青春与戯劇同行』（中国戯劇出版社、2007）などの著書にまとめられている。

３）教育演劇の効用については、以下の論文を参照した。
施毅《高校戏剧教育与大学生素质拓展》http://www.xzbu.com/5/view-1374336.htm
闫春燕《戏剧艺术在大学生素质教育中的重要作用》http://www.xzbu.com/7/view-38940.htm

４）孙惠柱《社会表演学：现实与虚拟之间》
http://blog.sina.com.cn/s/blog_631fa7ef0100v926.html

５）この全記録は『桂迎先生　文学文芸ワークショップ』にまとめ、関係者に配布した。

６）その記録は「心のコミュニケーションを創造する演劇教育空間について――神戸学院大学及び関西地区高校演劇部におけるワークショップの記録と思考」（伊藤茂、桂迎と共著、人文学部紀要、2008年３月）に詳しい。

７）ワークショップ形式の学習におけるアイスブレークの重要性については、ちょんせいこ「学校が元気になるファシリテーター入門講座」解放出版社、2009。津村俊充・石田裕久編「ファシリテーター・トレーニング」ナカニシヤ出版、2005を参照した。